

ヘーゲルの措定的反省

岡崎 秀二郎

1. はじめに

本稿はこれまでの私自身のヘーゲル反省論研究を踏まえ、ヘーゲル哲学に通底する視座としての、内在的反省或いは措定的反省（*immanente oder setzende Reflexion*）と外在的反省或いは外的反省（*äußerliche oder äußere Reflexion*）の区別（WL 2, 25-8, 30）がもつ意味を詳らかにすることを目的とする。

一方で反省が、反省の対象である内容に内在的（*immanent*）であるという性格は、『大論理学』を含めヘーゲル哲学の最も一般的な方法論上の理念を表現する¹。すなわちヘーゲルは哲学が学知たるべき条件として、自らの体系上の展開に次の様な制約を課す。つまりこの論理上の展開は、外在的な反省に根拠をもつのではなく、内容に固有の反省が内容自身の規定を措定し、生み出す、いわば内容の自己措定（*Sichselbstsetzen*）により実現されねばならない（WL 1, 16）²。言い換えるなら真理たる学知は、知の内容に外在的な基準ではなく、あくまで当の内容に内在的な視点から真理であると判断されるものに訴えることで更なる真理が獲得されねばならない。この意味での方法論上の理念は、「真理は実体（*Substanz*）としてではなく、それと同様に主体（*Subjekt*）として把握され、表現されねばならない」（PG 23）というヘーゲルの哲学的プログラムの根本命題にも見られる³。つまり学知が何らかの実体的真理の現れであるならば、その学知は「もっぱら主体としての実体とその規定を展開し、実体としての自分自身を同時に、規定性が有する規定同士の関係性の内に自己措定する」ものでなければならない⁴。

他方において、反省の外在性（*Äußerlichkeit*）は、カント及びフィヒテ哲学といった、ヘーゲルの方法論上の理念を正当化する上で批判対象となるべき反省の姿勢を度々表現する（WL 1, 271; WL 2, 30-1）。少なくともその意義は、『精神現象学』における「我々」の観点に象徴される、学知の論理展開そのものからは独立した視点や前提を通じて対象に反省を加えることに見出される⁵。しかし「外在的反省」に対しても、内在的な学知の展開にとっての構成的な機能が付与されると考えられる側面がある。最も広く共有される「外在的反省」の構成的機能に対する解釈は、「自己（内）還帰（*Rückkehr in sich*）」と呼ばれる反省の作用に関連する。こ

の反省作用の「還帰」という性格を重んじるのであれば、反省が内在性を獲得するには、一度反省作用の外の視点に立つ外在性を経た後に、再び実体としての主体へと戻ることが必要であると推測されることにその理由がある。

以上から内在的反省と外在的反省が学知の展開に寄与するであろう側面をまとめれば、それらはそれぞれ「自己措定」と、「自己還帰」の作用に関連すると言えそうである。ところが「措定」と「還帰」を論じる反省の論理はこれと全く逆の事態を描写する。つまり、実体的真理による「自己措定」という理念は、内在的な絶対的反省 (absolute Reflexion) 自体からは実現せず、むしろ外在的反省という要素を加えることで実現されると説明される (WL 2, 33)。対照的に「自己還帰」は、反省の外在性を述べる以前の絶対的反省の作用として主題的に説明される。ヘーゲルのこうした叙述は一見錯綜し、混乱しているように感じられる。しかし本稿は、この「自己措定」と「自己還帰」というヘーゲルの反省理論の概念対に対し、叙述の通りの対応関係に即してそれぞれ内在的反省と外在的反省の機能を対応させる解釈上の矯正を通じて、初めてヘーゲル反省論の織りなす実相が露わになると考える。こうした意図から本稿はまずは措定的反省に考察対象を絞り、反省論の構成に従い考察を進める。すなわち、第1節では「本質」概念の一般的導入を行い、第2節では「措定」、第3節では「前提」について考察を行う。上述のようにこの考察の中心的課題は、措定的反省が何故「自己還帰」と結びつけられ、逆に「自己措定」を認められないのか、という点を明らかにすることであり、この問題を通じてヘーゲルの内在的反省の実相を示すことを最終目的としたい。

2. ヘーゲルの実体形而上学批判と本質概念

ヘーゲル哲学の方法論上の理念によれば、真理は実体かつ主体として把握され、表現されねばならない。それゆえ「存在の真理が本質である」(WL 2, 13) という定義とともに導入される「本質 (Wesen)」も、何らかの形で「実体」かつ「主体」として働くことで反省作用を担わねばならない。本節では、この二側面を満たすような「本質」概念の含意を確認しつつ、私自身がこれまで「本質」概念に与えた考察を再び導入したい。第一に、上述のヘーゲルの「実体」理解に決定的影響を与えたと考えられるのは、スピノザ形而上学である。スピノザにとっての「実体」概念を概略的に説明するなら、「実体」とは、自分自身によってのみ存在するもの、つまり一者としての神であり、あらゆる存在者はこの神から論理的必然性によって生じる⁶。そして存在者の諸々の属性の諸様態は、絶対的に無限な実体が、

変様を被る限りで導出される⁷。ヘーゲルはより端的に、無限な実体が限界を加えられることで属性を規定するという関係性を、自身の哲学体系の原理として導入する⁸。つまり、「本質」が「実体」として何かを「措定」するのは、無規定的で無限な「本質」が、そこに限界を付された有限な規定性を与えることに等しい⁹。

従って本稿が問題にする「自己措定」とは、こうした無限的な「本質」が有限的な規定性を、言わば自己原因として与えるような作用である。度々指摘されるように、こうした自己原因たる「本質」がいかにして「自己措定」という作用を担うのかという点こそが、ヘーゲルから見たスピノザ哲学の残した課題である¹⁰。とりわけ問題なのは、スピノザにおいては諸属性の様態に対する「実体」の変様が静態的に捉えられるに過ぎず、「措定」という動的な関係がそこには見出され得ないという点である¹¹。正確にヘーゲルの説明を反映させれば、スピノザの「実体」に欠けるのは、「規定すること及び形作ること (Bestimmen und Formieren)、そして同時に還帰しつつ、自ら始めるところの運動 (zurückkehrende und aus sich selbst anfangende Bewegung) としての思惟 (Denken)」であり、ヘーゲルはこの「実体」に欠けるものを「人格性の原理 (Prinzip der Persönlichkeit)」と呼ぶ (WL 2, 195)。

従ってひと言で言えば、ヘーゲルがスピノザの「実体」理解に欠如すると考えるのは、実体的真理が同時に人格的な「主体 (Subjekt)」として働くという方法論上の理念の他方の面である。ここには「主体」的な思惟による反省作用に裏付けられた根本命題に、哲学体系の原理を担わせることを企図した、フィヒテ反省論の影響を見て取れる。上述引用にある通り、ヘーゲルは人格的で主体的な思惟の働きを、「規定すること及び形作ること」と表現する。ここに反映されているのは、反省の措定が、「内容」でなく抽象化された「形式」にのみ関わる、という意識である。だが、ヘーゲルに先んじて思惟の作用を内実と実在性のない自己関係的な関係として構想したのは、フィヒテの反省理論であった。ヘーゲルは反省論の前提として、このフィヒテが導く反省主体の性格、つまり形式的側面にのみ関わる「純粹で空虚な活動性」の作用主体としての「自己」を、「純粹自我 (das reine Ich)」として、「通常の自我 (das gewöhnliche Ich)」から区別する考えを取る¹²。

スピノザ的「実体」が神の存在として想定されることを踏まえれば、「実体」が同時に人格的な「主体」であるという主張は荒唐無稽に思える。しかし上に確認されるように、「本質」が人格的な「主体」として振る舞うことで要求されるのは、内容を捨象された、純粹で空虚な活動性として「措定」の作用を担うことに等しい。言い換えれば、「実体」が同時に人格的な「主体」であるという主張は、通常の意味での人格的な主体を要求しているわけではなく、そこでは、論理形式へと

抽象化された思惟の作用が担われることのみが要求される。その意味に限ればその主張は、神から存在者の属性への変様を論理的必然的な展開と捉えるスピノザの「実体」理解からもさほど遠くはない¹³。とは言え、以上の「本質」の「実体」及び「主体」の二側面、つまり無規定的で無限な本質から有限な規定性が展開される側面と、この措定が空虚な活動性として担われる側面には、極めて抽象度の高い内容しか含意されず、両者を統一的に考えることは困難である。しかし私は、これらの抽象的条件が単に独立して想定されたのではなく、ヘーゲルが何らかの具体的な描像を念頭に置いた結果としてこれらの条件が要請されたと考えたい。

これまでの私の考察では、その描像は、ヘーゲルの「光」の理解に結びつく。ヘーゲルは光それ自体の性質であるア・プリオリな概念規定として次の三点を想定する。つまり (α) 「完全に規定を欠いた、自己自身の内での発露」、(β) 「分離された実在」を伴わない「空間への膨張」、(γ) 「光は自身の限界に至らなければならない」ということの三点である (Enz 2, § 275)。この内 (α) は「本質」の「主体」、(γ) は「実体」的側面に対応すると考えられる。つまり (α) は、光以外の物体に色や熱等の実在的属性が付与されない限り、光それ自体には何らの性質も見出しえないことに相当する。従って光は純粹な発露として、内容を捨象された形式的作用を担うに過ぎない「主体」と見なしうる。他方で (γ) は、光の属性が付与される条件として、例えば太陽光に対する地球のように、無限に発露する光が光以外の物体に衝突する必要があることに相当する。つまり光は光とそれ以外の物体を区別し、無限的作用に限界が設けられる限りでその属性を光以外の物体に付与する¹⁴。それではヘーゲルがこの描像に基づいて「本質」概念に要請したものを、「自己措定」と「自己還帰」という発想に即していかに反省論に反映させたのか、次節以降その記述の展開に沿って順に考察することにした。

3. 措定的反省＝自己に還帰する運動

3. 1 「還帰」としての措定

ここからは措定的反省の具体的考察を行うが、既に述べたようにここで問題となることを一言で言えば、措定的反省が「自己措定」でなく「自己還帰」に結びつけられることである。差し当たりこの問題に当たるため、まず措定的反省における「措定」と「還帰」の意味を分析する方策を取ろう。「措定的」反省という名称に反し、ヘーゲルはむしろこの「還帰」を第一義的なものとして「措定」作用を定義する。すなわち、「反省が措定であるのは、反省が還帰すること (Rückkehren)

としての直接性 (Unmittelbarkeit) である限りにおいてである」(WL 2, 26)。

反省が「措定」として働くことに関する叙述の初出が、この抽象を極めた命題である以上、我々はここに現れる「還帰」と「直接性」という二つの概念を手掛かりにヘーゲルの「措定」像を手繰り寄せねばならない。では、まず「還帰」とは何を意味するのか。本質論を通じて繰り返しヘーゲルはこの「還帰」を、「無」としての「本質」が自己に還帰する運動、つまり「無から無への運動 (Bewegung des Nichts zu Nichts)」、「無が無を通じて自己に還帰する運動 (Bewegung des Nichts durch Nichts zu sich selbst)」であると主張する(WL 2, 25, 81)。この本質概念の第一義的な性格としての「無から無への運動」は、既に述べた「実体」及び「主体」の二側面が「本質」において両立していると考えことから解釈可能である。

「本質」は「実体」として自立的に存在する無限的存在であるが、同時にこの無限的存在は「措定」という空虚な活動性を担う「主体」的側面を伴わねばならない。このとき、非-自立的な「属性」に対しての自立的な「実体」の側面と、作用によって措定されたものに対しての空虚な活動性という「主体」の側面とは一体として理解せねばならない。例えば光の熱や色などの実在的な属性は光の作用が限界づけられることにおいて生じる。それゆえ光それ自体がもつ自立性は、光にとっての限界が存在せずに、むしろこの「属性」を付与することなく無限に発露する作用そのものの内に成立すると言わねばならない。それと類比的に、「本質」は「差し当たり無規定な本質である。存在の諸規定性は本質の内に止揚されている。本質は諸規定性をそれ自身においては (*an sich*) 含んでいるが、しかしそれは諸規定性が本質に属して (*an ihm*) 措定されているというのではない」(WL 2, 15)。繰り返せば、「本質」はそれが措定すべき「規定性」を含んではいるが、「本質」の空虚な活動性自体にこの「規定性」は帰属しない。ヘーゲルはこの「全有限の否定 (Negation alles Endlichen)」として現れる「本質」の活動性を、「単純な否定性 (einfache Negativität)」と呼び、そこから「本質」の自立性を「自己にとって異質な否定性によってではなく、自己に固有の、存在の無限の運動によって存在している」と説明する (WL 2, 13-5)。つまり実体かつ主体としての「本質」の自立性は、光の抽象的な発露に類比的に、空疎な運動が無限に進行するという活動性自体によって担保される。このとき、全有限を否定する空虚な活動性が無限に進行することを、「無から無への運動」であると表現することが可能であり、この無から無への運動が「本質」の措定作用の第一義的な意味であると言える¹⁵。

さて、次項では「本質」の定義のもう一つの鍵概念となる「直接性」の意味を探るが、そこでヘーゲルが用いるのは、運動を担う「本質」とその「本質」によ

って措定される「仮象 (Schein)」との対比である。そこで、「無から無への運動」を踏まえた「仮象」の位置づけを予め簡潔に確認しよう。本質の純粹に空虚な活動性は、規定性が含まれはするがそれ自身には帰属しないような、単純な否定性に担われるが、このことは次のようにも説明される。「本質は差し当たり単純な否定性であることによって、ただそれ自身に即して含むものとしての、自身の領域内に措定する規定性をもつに過ぎない」、あるいは、「本質の否定性が反省であり、諸規定は、射影されるもの (reflektierte)、つまり本質自身によって措定されるものであるが、本質の内では止揚されたものとしてあり続けるもの (als aufgehoben bleibende) である」(WL 2, 15)。つまり、本質の運動を「無から無への運動」として見れば、本質によって「射影される」諸規定とは、無限の運動に限界が存在しない運動領域内においては、光の無限の発露と同様、規定を与える当の措定作用の内に、つまり本質の運動領域内に含まれ続けるものに過ぎない。それゆえこの意味での「射影される」ものとしての「仮象」の規定性は、「自身の否定に媒介されている」と表現される (WL 2, 20)。要約すれば「仮象」とは本質の運動によって「射影される」ものであるが、「本質」が単純な否定性である限りは、その運動領域内に「止揚されて」いる、つまり消失しつつもそこに含まれ続ける。そしてこの運動領域内に含まれ続けるという意味において、「仮象」は、「本質」の「無から無への運動」によって文字どおり媒介されているものとして位置づけられる。

3. 2 「直接性」としての措定

さて、以上のように確かに「措定」は無から始まり無へと「還帰」する運動である。他方で、先のヘーゲルの定義によれば、反省が「措定」であるのはそれが同時に「直接性である限りにおいてである」と説明された。では、次に、この本質の運動と「直接性」とがどのような関係にあるのか、次の説明を見てみよう。

[1] 本質の否定性は本質の自己との同等性、あるいは本質の単純な直接性 (einfache Unmittelbarkeit) 及び無関心性である。[2] 本質が、その無限な否定性の中に、このような自己同等性 (Gleichheit mit sich) をもつかぎり、存在は本質の中に維持される。[3] このことにより、本質自身が存在である。

[4] 仮象に属する規定性 (die Bestimmtheit am Schein) は、本質に対して (gegen Wesen) 直接性をもつが、その直接性はそれゆえに (daher) 本質に固有の直接性以外のなにものでもない。[5] しかしその直接性は存在する直接性ではなく、正真正銘媒介された、あるいは射影された直接性 (vermittelte oder

reflektierte Unmittelbarkeit) であり、この直接性が仮象なのである。[6] つまり、仮象とは存在としての存在ではなく、媒介に対する (gegen die Vermittlung) 限りでの、単に存在の規定性としての存在である。[7] すなわち仮象とは契機 (Moment) としての存在である。(WL 2, 22)

ここで「直接性」概念の用法を概観すると、既に第1文に「本質」の「直接性」という表現が現れるが、第4、5文には、これと区別される「仮象」の「直接性」という表現が現れ、同時に第4文は「仮象」の「直接性」が「本質」の「直接性」とであると主張する。差し当たり「直接性」概念の理解は、この錯綜した内容をもつ第4文をいかに解釈するかに掛かると言える。そこでまず、予め確認した「無から無への運動」と「仮象」の内容を手掛かりに、「本質」と「仮象」の「直接性」の対比構造を明らかにすることから始めよう。既に確認した「仮象」の地位に対応する内容が述べられるのは、第5-7文である。つまり、「直接性」の語を等閑に付せば、第5文は、「射影され」かつ「媒介され」るものという「仮象」の位置づけを、第6、7文は、その存在が本質により措定される規定性であるが、本質の運動内では止揚され運動に「媒介され」る、契機に過ぎないことを説明する。

ここで第一に、第6文が「媒介に対する (gegen die Vermittlung)」形で規定性としての仮象が生じると述べるのに注意しよう。本質による仮象の規定は、太陽光が地球を照らす様に、無限的運動に限界が存在することで生じる。同様に仮象が「媒介に対する」形で生じるというのは、無から無への媒介的運動に限界が付されて仮象が生じるその条件に相当する。そのとき、仮象が媒介された (vermittelt) 或いは射影された (reflektiert) と言われる事態も同様に「媒介に対する」仮象の地位を表現すると考えねばならない。つまり媒介されるものは、光の発露に類比的な媒介的運動に限界が付され、媒介に対立する形で初めて生じる¹⁶。

他方で第二に着目すべきは、第5文においてこの「射影された」ものとしての「仮象」が射影/媒介された「直接性」と表現され、この射影された「直接性」と「存在する直接性」が区別される点である。ここで第1-3文を見ると、第2、3文は無限な否定性の中に自己同等性をもつことによって「本質」が「存在」を維持すること、そして第1文は「本質」に固有の「直接性」とは「本質」の「存在」を担保する否定性の自己同等性のことであると説明しているのであるから、上の第5文が対比するものは、否定性の自己同等性としてそこに「存在」を維持する「本質」固有の「存在する直接性」と、それが媒介/射影された、契機としての「仮象」の「直接性」という直接性概念の二側面であることが分かる。

それでは以上の二点から「直接性」概念の具体的考察に移ろう。一方で「媒介された」ものの地位が媒介的運動に対立することと同義であること、かつ他方でこの媒介的運動における否定性の自己還帰自体が本質の「直接性」であることを踏まえると、「本質」の「直接性」に関し次の推測が成り立つ。すなわち、否定性の中に自己同等性をもつ運動が直接的つまりは無媒介的 (unmittelbar) である事態とは、太陽光に対する地球のような光の進行を阻害するものが欠如する場合のように、〈媒介する本質の運動に対して対立するものが見出され得ない〉こと、そしてその結果、地表の輝きが表出しないように、運動に媒介されたものが表出しない事態を意味する。言い換えれば、媒介される (vermittelt) ことが仮象の成立条件を表現するのとは対照的に、単純な直接性 (einfache Unmittelbarkeit) という概念は、無から無への運動が、そこに何らの対立するものも見出され得ずに無限に進行することを意味し、その限りでそれは光の発露に類比的な反省作用自体の成立条件を表現する¹⁷。その意味で「本質」の「実体的な「存在」の自立性は、運動を担う否定性が自己同等性をもつ、つまりその「主体」的な能動性を維持し続ける限りで成立しており、射影／媒介されることでそれが語られる「仮象」の、あくまで産出されるものである受動的な存在から区別される。

最後に以上を「仮象」の側の「直接性」から捉え返すと次が帰結する。つまり、地球が光に照らされるように、何らかの仮象が本来直接的な本質の運動に対立して生じることは、その仮象が太陽光に相当する本質の運動によって射影されていることと同義であり、従ってそれは射影された「直接性」と呼びうる。ここから第4文が言う、〈本質に対立する〉ことを理由 (daher) として、〈射影された〉ものが本来は本質に固有の「直接性」であることを推論することが可能となる。

4. 措定的反省＝自ら始めるところの運動

4. 1 「直接性」としての前提

以上を通じ我々は反省が措定であるのは、反省が「還帰」することとしての「直接性」である限りである、という定義の含意を探求してきた。しかし措定的反省の実相は、むしろこの「還帰」と「直接性」の側面がいかに整合的に両立するかという点から明らかにされねばならない。ヘーゲルはこの問題を反省の「前提」の側面として考察する。すなわち「措定」としての「直接性」は、無から無への媒介的運動、つまり「関係づけられるものを欠いた純粋な関係」、「純粋な媒介 (reine Vermittlung)」でもある (WL 2, 81)。しかしこの媒介する運動を「還帰」として

捉える限り、そこには〈何かから始まって元の状態に戻る〉ことが含意される。つまり反省が「還帰」であるなら、媒介されたものを否定して無限の自己同一関係に達する以前に、何らかの形で「本質」の存在が「前提」されている必要がある。

例えばフィヒテは、自我の活動性に何か「対立」する事態において、「自己措定」が「前提」される必要があると考える¹⁸。フィヒテの考えでは「非我」が「措定」される場合（“Nicht-Ich=Nicht-Ich”）、一方でこの「措定」は「自我」自身に担われるために、判断の主語としての「非我」は既に「自我」の内に含まれる。他方で「非我」の「措定」は“Nicht-Ich≠Ich”、つまり〈「非我」が自我に「対立」する〉という判断として解することができるという意味で、〈自我に「対立」する〉という述部を担う「自我」が事前に措定されねばならない。故に主語述語両面に即し、「全ての対立はその中で措定され、そしてまたその措定されたものに対立するところの、自我の同一性を前提している」（SW I, 106）¹⁹。つまり無限に自己還帰する「自我」の活動性に「非我」が「対立」する際、「対立」させられる「自我」が「自我」自身の内に既に措定されたものとして予め見出されねばならない²⁰。

ヘーゲルの言葉を用いれば、「本質は自分自身を前提する。そして、この前提を止揚することが本質自身である。[...] それゆえ反省は、それを乗り越え、そこから還帰するところの直接的なもの (ein Unmittelbares) を事前に見出す (vorfinden)」（WL 2, 27）。しかしヘーゲルはこうして事前に見出された何かから始まり還る、という意味に「自己還帰」を理解することに対し、反省一般、措定、前提を論じる箇所それぞれで、三度にわたり批判を加える。その最初の説明を引用しよう。

存在の生成においては、規定性の根底に存在があり、その規定性は他 (Anderes) への関係である。反省する運動はこれに反して、否定それ自身としての他 (das Andere als Negation an sich) であり、この否定はただ自己自身に関係する否定として存在を有する。[...] しかしこの他に対する最初のもの (das Erste)、つまり直接的なもの (das Unmittelbare)、あるいは存在は、ただ否定の自己との同等性それ自体、つまり否定された否定、絶対的否定性ではない。この自己同等性 (Gleichheit mit sich) あるいは直接性 (Unmittelbarkeit) はそれ故、そこから始まるものでもその否定へと移行する最初のものでも、まして反省に終始動かされるような存在している基体 (Substrat) でもない。そうではなく直接性とはこの運動それ自身に他ならない。(WL 2,24)

最初の二文及び最後の一文を見て分かるように、ここで焦点が当てられているのは、否定性の無限に還帰する運動が、直接性という性格を持ち、この運動の自己関係的な持続により自立的存在を有する、本質の性格である。その上でヘーゲルが斥けるのは、「本質」の無限に還帰する運動を、事前に見出されたものから新たなものへ進行すると見なす考えである。つまり仮に運動の出発点に「本質」の存在を想定するのならば、少なくともその「最初」において同一的關係が限界づけられねばならない。フィヒテの構制で言えば、「非我」に対立する有限的存在として、「自我」の同一的關係性の措定（“Ich=Ich”）が事前に見出されねばならない。この限界づけられた直接的關係性は、直接性そのものに対して、「直接的なもの（das Unmittelbare）」と呼んで良いであろう。しかし三文目のように、ヘーゲルの定義からすれば「本質」の存在はこうした理解を許さない。なぜなら、そもそも直接性は否定性の無限的な自己同等性によって担保されるものであり、それが「最初」という限界を設けられる時点で直接的關係性は成立しないからである。

繰り返せば、措定に見られる「直接性」は一般に自己への「還帰」としてのみ現れ、本質は、そこから出発する直接性を「最初」として「前提」しなければならない。しかしその「最初」のものは「直接性」それ自身ではなく、運動が有限的に限界づけられた「直接的なもの」に過ぎない。逆から言えば、本質として「前提」されるものは、むしろ空虚な活動性が自己に還帰し、自己同等性を実現する時点で初めて明らかになると言わねばならない。しかしこの自己同等性を実現される「時点」は、再び何らかの形で限界づけられた「直接的なもの」、つまり反省が射影された「仮象」に過ぎない。それゆえ本質の「還帰」は、それが「直接性」を維持する限りで、限界づけられた「仮象」としての「直接的なもの」を否定する、つまり地表の輝きに類比的な仮象をむしろ表出させないように、光の発露の様に空虚な活動性へと復帰しつつ再び無限に進行する運動それ自体に他ならない。

4. 2 措定即前提

前項で確認されるように、反省の自己還帰において「前提」されたものが明らかになるのは、当の「前提」されたものが失われ、その「直接性」が還帰として実現される限りである²¹。つまり、「本質は自己自身を前提し、この前提の止揚が本質自身である。逆に、前提の止揚が前提それ自身である」（WL 2, 27）。しかし同時に、「直接性は一般に、もっぱら還帰としてのみ現れ、始まりの仮象であるところの否定的なものであるが²²、この仮象は還帰によって否定されるものである」（WL 2, 27）とも述べられるように、還帰として「直接性」が実現される特定の

「時点」を見出すことは、再びその「直接性」を有限的な「仮象」としての「直接的なもの」とみなすことになる。上に続いて「本質の還帰は、それ自身の自己からの自己反発である」とも述べられるように、空虚な活動性の直接性が維持されるためには、本質が特定の「時点」において自己の活動性に還帰しつつも、そこから無限に活動を始める必要がある。その意味で、「直接性」として捉えられる活動においては、常に始まることと還帰することが〈同一の〉関係の内に捉えられる。この点について「前提」に関するヘーゲルの批判の続きを取り上げよう。

- [1] 反省は、それを乗り越えそこから還帰するところの直接的なものを事前に見出す。[2] しかしこの還帰は差し当たり事前に見出されたものを前提する。[3] この事前に見出されたものが生じる (*werden*) のは、ただ事前に見出されたものが失われる (*verlassen*) 限りである。[4] つまり事前に見出されたものの直接性とは、止揚された直接性である。[5] 逆にその止揚された直接性は、自己自身への還帰であり、本質の自己への到達 (*Ankommen*) であり、単純な自己同等的な存在である。[6] このことによって、この自己への到達は、自己自身の止揚であり、自己自身を前提する、前提する反省である。[7] そしてその自己からの反発は、自己自身への到達である。(WL 2, 27)

上に確認した様に「前提」された「直接性」の内容が明らかになるのは、当の止揚された「直接的なもの」が失われ、本質の自己還帰として「直接性」が実現される限りである。この点に限ればヘーゲルはもっぱら「前提」の有限的側面を否定すること、つまり「前提」が有限的なものとして事前に見出され得るものではないことを批判的に主張するに過ぎない²³。しかしすでに述べたようにヘーゲルの批判は、単に「直接性」を事前に見出されたものから還帰する運動としてみなす考えだけでなく、運動の還帰が実現する特定の「時点」において「直接性」が実現するとみなす考えにも向けられる。この事態を第3文以降で確認しよう。

「事前に見出されたものが生じる (*werden*)」という叙述で問題になる作用は、本質の作用を射影することで有限を規定する、「措定」である。他方「ただ事前に見出されたものが失われる (*verlassen*) 限りである」という表現で問題になるのは、逆に「前提の止揚が本質自身である」(WL 2, 27) と述べられた、「前提」である。

すなわち、有限な直接性(直接的なもの)が生じるのは「還帰」としての「措定」による。しかし同時に直接性としての還帰は、何ものも媒介しない自己同等性を実現することで初めて成立する。従って、一方で「前提」において「事前に

見出されるもの」は、本質の運動の無限的な「直接性」が止揚されることで見出されるものである（第4文）が、「措定」において止揚された「直接性」を生じさせるのは、当の本質の運動の「直接性」である（第5文）。従って「直接性」に着目する限りで、自己への到達としての「措定」は、反省が還帰する元の「最初」を「前提」することに等しく（第6文）、逆に自己を「最初」として出発する「前提」は、自己還帰の実現としての「措定」が成立することに等しい（第7文）。

ここには、措定及び前提が、常に「直接性」という自己同一的な関係の内でのみ把握可能なものである、というヘーゲルの考えがある。その関係とはつまり、「最初」が「還帰」する運動として実現され、「還帰」が「最初」の活動性を奪還することで成立する、というものである。この自己同一的關係性としての「本質」の性格は、既に挙げた光のア・プリアリな概念規定の(β)「分離された実在」を伴わない「空間への膨張」という性格に類比的に、実際には特定の限界を伴う意味でのいかなる「最初」も「到達」も許容しないものであると言える。

5. 結論に代えて

以上「措定」と「前提」の意味が明らかになることで、ようやく我々は本稿の主題であった、絶対的反省の「自己措定」作用を否定したヘーゲルの意図に辿り着くことができる。措定即前提とは、「直接性」としてのみ表現しうる同一の反省作用の両面性を表現する。しかし上に引用した箇所をよく見ると、ヘーゲルは必ずしもこの両面に、同一の「直接性」の事態を想定するわけではないことが分かる。つまり一方で有限的な「直接性」は、自己還帰的な「措定」としての「直接性」に由来する（第5文）が、他方で「直接性」を有限的なものとして事前に見出すことは、ヘーゲルが批判したように、当の「直接性」を「最初」として限界づけることで生じる（第4文）。それゆえ一面では何かを成立させるという意味で、無限に自己へと到達する運動の中に措定されたものが生じる契機が含まれ続けるが、他面では事前に見出された「直接的なもの」が生じるのは、無限的運動の結果として初めて成立する、直接的な自己同等性を阻害する限りにおいてである。

つまり、一見すると「自己措定」を実現しうる「措定」と「前提」の一致という事態から、同じ自己還帰によって措定される物が生じ、また失われるという事態が導かれる。だから、この関係に着目する限りで、「事前に見出されたものが生じるのは、ただ事前に見出されたものが失われる限りである」という矛盾的事態が生じる。それゆえに、絶対的反省においては「自己措定」は実現しない。と言

うより、措定する自我の存在と同一の存在が、自我によって措定される存在に等しいかどうかを、絶対的反省そのものからは論証することはできない。それは単に措定作用が無限に空虚な作用であり続けるが故に、反省と措定されたものとの関係を述べ得ないという問題ではなく、その関係を「措定」と「前提」として定式化した上で、反省の、措定されたものを生じさせる関係と失わせる関係が、同一的關係として区別不可能であるという原理的な問題である。本稿で問題とした措定的反省に対し、「外在的反省」はまさにこの点を補完するものとして想定される。従って「自己措定」という方法論上の理念がこの「外的反省」からいかんして実現されるのか、という問題を、近い将来の課題とし、ここで本稿を閉じよう。

¹ Jaeschke (1978, 86) 参照。

² PG, 40 参照。

³ Henrich (1978, 204) 参照。

⁴ Henrich (1978, 210) 参照。

⁵ 外的反省の意義として、古くはイェーナ体系構想Ⅱに由来する次の側面が指摘される。つまりそれは、論理規定の展開全体を既に通り過ぎた視点から、内的な論理展開に対して「見直し」を与えるものである（この点については Jaeschke (1978, 90, 108) 参照）。

⁶ E, 1P26, 1P29, 1P2D 参照。

⁷ E, 1P28 参照。

⁸ 「絶対者の概念及び絶対者に対する反省の関係性には、ここで描写された様にスピノザの実体概念が相当する」(WL 2, 195)、「全規定性の基礎は否定である(スピノザが言うようにあらゆる限定は否定である)」(Enz, § 91, Zusatz)。

⁹ WL 2, 15 参照。

¹⁰ Kaehler (2012, 148) 参照。

¹¹ 「スピノザにおいては[...]無限性は単なる物の絶対的な確約(Affirmation)に過ぎずそれゆえ単なる不動の統一に過ぎない」(WL 1, 179)。但しヘーゲルのスピノザ批判が正鵠を射たものでないことは度々指摘され批判の正当性は論争的な問題である(cf. Parkinson (1977, 458))。

¹² GuW, 397, WL 1, 76 参照。

¹³ ローは、新プラトン主義、とりわけヘルダーを通じて、神と人格的存在の類縁性の発想がヘーゲルに取り込まれたことを論じるが、この類縁性が常に「形式」という観点を前提に理解されるとローが論じるように、ヘーゲルにおいて宗教的神の存在と、一般的経験的な人格的意識の区別が無条件に等閑視されていたわけではない。詳しくは Rohs (1969, 31-7) 参照。

¹⁴ この実体的側面は「光が光自身と闇とを顕す」とするスピノザの理解に対応する(E, 2, P43S)。

¹⁵ この意味での反省の「直接性」という概念は、実際にはフィヒテ及びカントに遡る(SW I, 256-7; KrV, A19/B33, A51/B75などを参照)が、本稿においては紙幅の関係上この概念史的背景については触れられない。「直接性」概念史については、Arndt (1994), Arndt (2013)を参照。

¹⁶ 同様に、第4文前半部の「本質に対して(gegen Wesen)」仮象の規定性が存在するという内容も、やはり媒介的運動に「対する」形で生じる「仮象」の地位を説明していると考えねばならない。

¹⁷ WL 2, 22 参照。

¹⁸ フィヒテにおいて自己自身に戻る活動性は自己規定の前提と見なされる(SW I, 240 参照)。

¹⁹ フィヒテは「A=A」で表される命題を、主語述語の区別をもつものと想定する。特に“Ich=Ich”においては、「自己自身を反省の対象となす自我」、つまり主語である「自我」の主体的作用によって、客体となる「自我」が措定されることが意味される。それ故に「A=A」で表さ

れる限りのあらゆる対象は、それが主体的な措定作用に担われる限りで、主語としての主体的自我に含まれる。また判断の述部を構成しうるものは、既に反省の対象になったものであるから、やはり自我により事前に措定されていなければならない (SW I, 96, Anmerkung 参照)。²⁰ ヘーゲル同様「自我」の活動性それ自体は「非我」が対立する有限的存在である「自我」から無限性へと「還帰」する運動と捉えられるが、フィヒテはこの自我と非我の交互規定 (Wechselbestimmung) を通じて対立が「媒介」され、統一化されると説明する (SW I, 131 参照)。²¹ ゆえに前提されたものは同時に目的 (Ziel) でもある (cf. Zimmerli (1986, 85); Wetzel (1971, 63))。²² 本論で詳述され得ないが「否定的なもの (Negative)」という表現は、「否定性 (Negativität)」と対比的に用いられ、「直接性」と「直接的なもの」と同様の構造的区別を示すために用いられていることが観察される。つまり「否定性 (Negativität)」が、空虚な活動性が無限に進行する「直接性」の担い手として用いられるのに対し、「否定的なもの (das Negative)」はこの否定的活動性が限界づけられ、射影された、有限的な「直接的なもの」の地位を表現する。²³ ヘーゲルの批判を素朴に見れば、無限的運動を有限的に見なすことへの批判であるように見える。例えば山口 (2010, 280) などを参照。

[参考文献]

1 ヘーゲル、フィヒテ、カント、スピノザの著作

Hegel, Georg W. F. 1986. *Wissenschaft der Logik I/II*, Suhrkamp. (WL 1, 2)

———. 1986. *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse 1830 I/II/III*, Suhrkamp. (Enz)

———. 1986. *Phänomenologie des Geistes*, Suhrkamp. (PG)

(※『エンチクロペディー』からの引用は、巻数及び節番号を記す。□は筆者自身による挿入または省略を表す。)

Fichte, Johann G. 1997. *Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre*, Meiner.

(※『全知識学の基礎』(1794年)からの引用は、SW版全集の巻数と頁数を付記する。)

Kant, Immanuel. 1998. *Kritik der reinen Vernunft*, Meiner. (KrV)

(※『純粋理性批判』の引用は、第一版(1781年)をA、第二版(1787年)をBとし、それぞれの頁数を記す。)

Spinoza, Benedict de. 1925. *Opera im Auftrag der Heidelberger Akademie der Wissenschaften*, Carl Winter. (E)

(※『エチカ』からの引用は、巻数を省略し、定理=P、証明=D、備考=Sとして、各部、各定理等の数字を付記して行う)

2 その他の著作

Arndt, Andreas. 1994. *Dialektik und Reflexion. Zur Rekonstruktion des Vernunftbegriffs*, Meiner.

———. 2013. *Unmittelbarkeit*, Owl of Minerva Press GmbH.

Henrich, Dieter. 1978. “Hegels Logik der Reflexion,” *Hegel-Studien Beiheft* 18, Meiner.

Jaeschke, Walter. 1978. “Äußerliche Reflexion und immanente Reflexion. Eine Skizze der systematischen Geschichte des Reflexionsbegriffs in Hegels Logik-Entwürfen,” *Hegel-Studien* 13, Meiner, 85–117.

Kaehler, Klaus E. 2012. “Hegels Kritik der Substanz-Metaphysik als Vollendung des Prinzips neuzeitlicher Philosophie,” *Metaphysik und Metaphysikkritik in der Klassischen Deutschen Philosophie Hegel-Studien, Beiheft* 57, Meiner, 133–60.

Parkinson, G.H.R. 1977. “Hegel, Pantheism, and Spinoza,” *Journal of the History of Ideas*, 38, University of Pennsylvania Press, 449–59.

Rohs, Peter. 1969. *Form und Grund. Interpretation eines Kapitels der Hegelschen Wissenschaft der Logik*, *Hegel-Studien Beiheft* 6, Meiner.

- 山口祐弘. 2010. 『ドイツ観念論の思索圏 哲学的反省の展開と広表』, 学術出版会.
- Wetzel, Manfred. 1971. *Reflexion und Bestimmtheit in Hegels Wissenschaft der Logik*, Stiftung Europa-Kolleg; Fundament-Verlag Sasse.
- Zimmerli, Walther C. 1986. *Die Frage nach der Philosophie, Hegel-Studien, Beiheft 12*, Meiner.